

装潢技術と文化財修理の近代化

株式会社 岡墨光堂
会長 岡興造氏

東洋の書画を修理する技術は、千年以上の伝統をもつ装潢技術を基本としている。「装潢」という語は一般的ではないが、奈良時代の文献に既にあらわれており、表装とほぼ同義である。紙や絹にあらわされた書画は、そのままの状態では取扱いができない。例えば掛軸であれば、裏打ちをされ、周囲を表装裂で装われることによって、鑑賞し保存できるかたちをなす。装潢は書画を守るために不可欠な技術であり、繊細な素地にあらわされた東洋の書画が、人の手で守られ長く命を保っているのは、伝統的な材料と技術で修理を繰り返してきたためであると言える。

私たちの工房の出発点は、新画（その時代の作家による新作）の表装を主とする表具店であった。第二次世界大戦後、国の文化財保護法の成立により保存修理が行われるようになり、それからの半世紀は、自然科学の視点との出会い、修理に対する考え方の変化、修理技術者としての自覚と共通認識の醸成という、現在の文化財修理の世界に至るまでの大きな変化があった。「手早くきれいに直す修理」から、「安全で作品の保存上適切な修理」へ、目指す方向が変化した過程で、様々な新しい技術や材料が開発された。

一例をあげると、現在の絹本絵画の修理で欠かすことのできない、電子線劣化絹という材料、そして乾式肌上げ法という技術の開発がある。昭和40年から46年にかけて開発した電子線劣化絹は、大型の絹本作品に適合する補修用の絹がないという切実な問題を原点としている。織目を復元し、本紙の脆弱度に合わせて劣化させた絹を人工的に作ることができないか、数年にわたる試行錯誤が繰り返され、ようやく実用にこぎつけることができた。また、乾式肌上げ法は、昭和50年代に開発された、最小限の水分で旧肌裏紙を除去する方法である。本紙を支える肌裏紙の打ち替えは、本格修理をする上で最も重要な工程となる。乾式肌上げ法は、絹本絵画の裏彩色を保存しつつ肌裏紙のみを除去する方法として開発された。小面積にごく少ない湿りを与え、時間をかけて裏の繊維をほぐすようにとる方法である。オリジナルの表現をいかにして守るかという命題のもと、このような新しい材料と技術が開発された経緯を述べ、文化財修理の世界の伝統と近代化の諸相を紹介したい。

新しい技術や材料が生まれる一方で、昭和50年代以降には、伝統技術と伝統材料の合理性、安全性を科学的に立証しようとする動きも生まれた。何百年、あるいは千年以上を生きる文化財の時間からすれば、百年以上の経過観察を経ていない新材料を安易に使うことは許されない。文化財とともに、伝統材料と伝統技術が継承されていくことが、ものを守り伝えるためには不可欠である。いまや一部は存続の危機にある伝統材料の問題についても紹介し、現在、文化財修理の現場が直面している課題についても共有したい。